ドリームランドのイェーツ
——『ケルトの薄明』と『葦間の風』を中心に

河　野　庸　二

はじめに

W. B. Yeats(1865-1939)は，その長い文学的経歴の中で幾多の変貌をとげつつ，最晩年まで発展し続けた詩人であるとの評価が一般的である。例えば‘early Yeats’という表現自体，彼の詩がその後大きく変容したことを含意していることに気付く。したがって，今日では必然的に，どちらかといえば中期，後期の作品が重視される傾向があり，初期を代表する詩集 *The Wind among the Reeds* 『葦間の風』(1899)の中の，当時の詩風を代表する神韻縹緲とした数々の詩篇といえども，もはやアンソロジーには採られることが少なくなっているのが実情である。もっとも，イェーツはこの詩集においても，アイルランドの神々や妖精ばかりを歌っているわけでは決してないのであるが。一方，のちにそのタイトルが「セルティック・ルネッサンス」の別称ともなった，アイルランド版『遠野物語』とも呼ぶべき内容の散文集 *The Celtic Twilight* 『ケルトの薄明』(1893)は，いわばそういう詩篇の背景をなす，初期のイェーツ詩鑑賞のためには欠かすことの出来ない貴重な資料であると同時に，芸術的香気の高い文学作品であるにもかかわらず，これまた顧みる者はそう多くないと思われる。そこで，初期のイェーツ詩，殊に神話や妖精の世界に仮託した象徴詩に心ひかれる筆者が，今一度，筆者独自の角度から，イェーツの神仙世界を代表するこれらの作品に光を当ててみようというのが本稿の意図するところである。

『ケルトの薄明』の構成

詩人には，自己の旧作に一切手を入れないタイプの人と，逆に絶えず改作を試みるタイプの人とがあるようであるが，イェーツの場合は紛れもなく後者の典型だったといえる。そのことは *The Variorum Edition of the Poems*

of W. B. Yeats という大冊の本が出ていることからも明らかであるが，彼の場合，そういう完璧主義は詩作品だけにとどまらず，散文による著作にも及んでいた。事実，*The Celtic Twilight, The Secret Rose*『神秘の薔薇』(1897)をはじめとする内容の似かよった著作がのちに1巻にまとめられた，*Mythologies* (1962)の巻頭に載せられたNote(1925)の冒頭に次のように明記されている。

> I have left out a few passages in *The Celtic Twilight*, which was first published in 1893. [1]

さらに，*Mythologies* に収められた，つまり定本の，*The Celtic Twilight* を繙読すると，作者が初版本から「2，3のパッセージを削除した」だけではないことが分かる。すなわち，初版本以降に追加された章の末尾にのみ年号が記されているので，かなりの部分が1902年までに新たに書き加えられ，それらの章が，全体のバランスを考慮して随所に配置されているのを知ることが出来るのである。

『遠野物語』的世界

柳田国男が『遠野物語』の初版を世に問うたのは明治43年（1910）のことであった。しかし年代的には可能であっても，柳田がイェーツの影響を受けたことはまず考えられない。とはいえ同書とイェーツの『ケルトの薄明』には，その成立事情と言い，内容と言い，共通点が少なくないのである。それどころか，そこに収められた話自体，またその語り口自体，両者の中には驚くほど類似したものが見出されるのである。試みに，『ケルトの薄明』中の2篇からのそれぞれ一節を引用し，『遠野物語』の一節と対比させてみることにする。

> A little girl who was at service in the village of Grange, close under the seaward slopes of Ben Bulben, suddenly disappeared one night about three years ago. There was at once great excitement in the neibourhood, because it was rumoured that the faeries had taken her. A villager was said to have long struggled to hold her from them, but at last they prevailed, and he found nothing in his hands

but a broomstick. The local constable was applied to, and he at once instituted a house-to-house seach, and at the same time advised the people to burn all the *bucalauns* (ragweed) on the field she vanished from, because bucalauns are sacred to the faeries. They spent the whole night burning them, the constable repeating spells the while. In the morning the little girl was found wandering in the field. She said the faeries had taken her away a great distance, riding on a faery horse. At last she saw a big river, and the man who had tried to keep her from being carried off was drifting down it — such are the topsyturvydom of faery glamour — in a cockleshell. On the way her companions mentioned the names of several people who were to die shortly in the village. [2]

(ベン・バルベン山の海側の斜面の麓のグレンジ村で働いている少女が今から3年ほど前に，ある夜突然姿を消した。妖精にさらわれたのだという噂がたって，近所はたちまち大騒ぎになった。ある村人が，必死になって何とか妖精たちから彼女を引き止めようとしたが，ついに負けて，気がついてみると，彼が握っていたのは箒の柄であったという。地元の巡査が呼ばれたが，彼はただちに一軒一軒しらみつぶしに捜索にかかると同時に，少女の姿を消した野原でありったけのオグルマを燃やすようにと人々に指図した。オグルマは妖精の草だからである。人々は夜通しオグルマを燃やし続けたが，その間巡査は呪文を唱え続けた。朝になって少女は野原をさまよい歩いているのが見つかった。彼女は妖精たちにずいぶん遠くまで妖精の馬で連れ去られたのだという。やがて大きな川が見えてきて，彼女を引き止めようとした男がザルガイの殻に乗って流れていくのが見えたそうな。そんなめちゃくちゃであべこべなところが妖精の魔力なのである。途中彼女に連れ添った妖精たちは，村で近々死ぬことになっている人たちの名をいちいち挙げたという。)

Sometimes those who are carried off are allowed after many years — seven usually — a final glimpse of their friends. Many years ago a woman vanished suddenly from a Sligo garden where she was walking with her husband. When her son, who was then a baby, had grown up he received word in some way, not handed down, that his mother was glamoured by faeries, and imprisoned for the time in a

house in Glasgow and longing to see him. Glasgow in those days of sailing-ships seemed to the peasant mind almost over the edge of the known world, yet he, being a dutiful son, started away. For a long time he walked the streets of Glasgow ; at last down in a cellar he saw his mother working. She was happy, she said, and had the best of good eating, and would he not eat ? and therewith laid all kinds of food on the table ; but, he knowing well that she was trying to cast on him the glamour by giving him faery food, that she might keep him with her, refused and came home to his people in Sligo. [3]

（時にはさらわれた人たちが何年も――普通は７年――たってから知人の見納めをすることを許されることがある。昔ある女が夫とスライゴの庭園を歩いていて突然姿を消した。当時赤子であったその息子が成人した時，母親が妖精にさらわれたこと，そして今グラスゴーのある家に閉じ込められていて彼に逢いたがっていることを伝え聞いた。帆船の時代のグラスゴーといえば貧しい農夫にはおよそ地の果てのように思われたが，それでも律儀な息子は出かけて行った。彼は長いことグラスゴーの街を歩いたが，やっとのことである地下の物置で母親が働いているのが見つかった。母親は言った。わたしは幸せにしているよ，いつもおいしいものを食べているよ，お前も食べないかい。そう言ってありとあらゆる食べ物をテーブルに並べてみせた。しかし，彼は母親が妖精の食べ物を彼に与えて魔法にかけて，彼を自分のところに引き止めようとしていることをよく知っていたので，ことわってスライゴの里に戻ってきたのである。）

八　黄昏（たそがれ）に女や子供の家の外に出ているものはよく神隠しにあふことは他（よそ）の国々と同じ。松崎村の寒戸（さむと）といふ所の民家にて，若き娘梨の樹の下に草履（ぞうり）を脱ぎおきたるまま行方を知らずなり，三十年あまり過ぎたりしに，ある日親類知音の人々その家に集まりてありし処へ，きはめて老いさらぼひてその女帰り来たれり。いかにして帰つて来たかと問へば，人々に逢ひたかりしゆゑ帰りしなり。さらばまた行かんとて，ふたたび跡を留めず行き失せたり。その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は，今でも風の騒がしき日には，けふはサムトの婆が帰つて来さうな日なりといふ。[4]

以上のように『ケルトの薄明』は民間人からの聞き書きを主とする，あくまで folklore を中心とする散文集であって，古代アイルランド神話・伝説に関しては，ところどころで神々あるいは英雄等の事跡に言及する程度にとどまっている。次にその1例を示す。

> One hears in the old poems of men taken away to help the gods in a battle, and Cuchulain won the goddess Fand for a while, by helping her married sister and her sister's husband to overthrow another nation of the Land of Promise. [5]

要するに *The Celtic Twilight* をはじめとする，*Mythologies* に収められた散文による詩篇は，イェーツ初期の詩作と相通ずる世界を扱っており，両者は互いに密接に関わり合っているのである。

古きものへの愛着

若き日のイェーツが示した古きものへの愛着は，さまざまな形で投影されている。例えば今日，詩集 *Crossways* (1889)『十字路』に収められている愛唱すべき短詩 "Down by the Salley Gardens"「柳の苑生で」(1888 ?)は人口に膾炙する Song である。

> Down by the salley gardens my love and I did meet ;
> She passed the salley gardens with little snow-white feet.
> She bid me take love easy, as the leaves grow on the tree ;
> But I, being young and foolish, with her would not agree.
>
> In a field by the river my love and I did stand,
> And on my leaning shoulder she laid her snow-white hand.
> She bid me take life easy, as the grass grows on the weirs ;
> But I was young and foolish, and now am full of tears.

もっとも，この詩は半ば忘れ去られた古い歌の復元の試みと作者自身が注記しているものである。ところで，A. Norman Jeffares 編集による *Poems of W. B. Yeats, A New Selection* (1984)に載せられたこの詩の後注の中で編者

はそのことに触れたのち，注目すべき資料を載せている。

> Yeats described the poem as an attempt ‘to reconstruct an old song from three lines imperfectly remembered by an old peasant woman in the village of Ballysodare, Sligo’. The poem closely resembles the first two stanzas of the following folk poem with the same title (text in the National Library of Ireland, Dublin):
>
> Down by the Salley Gardens my own true love and I did meet
> She passed the Salley Gardens, a tripping with her snow white feet.
> She bid me take life easy, just as leaves fall from each tree;
> But I being young and foolish with my true love would not agree.
>
> In a field by the river my lovely girl and I did stand.
> And leaning on her shoulder I pressed her burning hand.
> She bid me take life easy, just as the stream flows on the weirs.
> But I was young and foolish I parted her that day in tears.
>
> I wish I was in Banagher and my fine girl upon my knee.
> And I with money plenty to keep her in good company.
> I'd call for liquor of the best with flowing bowls on every side.
> Kind fortune ne'er shall daunt me, I am young and the world's wide.[6]

編者は「イェーツの詩が同タイトルの民謡詩の第2スタンザまでと酷似している」と指摘するだけで，余計なコメントは差し控えているようであるが，ここにいくつかの疑問が生ずることは必至である。疑問点を整理してみると，

1．イェーツが「農家の老女が不完全に記憶していた」に過ぎないと思っていた詩の完全なテキストが，じつは残っていたのか。
2．イェーツのいう「農家の老女が不完全に記憶していた3行からの復元」が事実だとすると，同じタイトルのこの民謡の最初の two stanzas とあまりにも酷似し過ぎてはいないか。
3．むしろ，イェーツが古拙の民謡に手を加えて，洗練された形に改作した

のだと考えた方が自然ではないか。

このように考えると，イェーツが意図的に原詩の第3スタンザを削除したのではないかという推理もきわめて自然に成り立つのである。事実，編者はこの類別イェーツ詩集において，この詩を Adaptations and Translations の中に分類しているのである。イェーツよりおよそ1世紀前に，Robert Burns(1759-96)がやはり古拙の民謡に手を加えて，"Coming through the Rye" や "Auld Lang Syne" を今日歌われている形に整えたのと同じことを，イェーツも行なっていたと考えることは出来ないだろうか。以上は単なる仮説にすぎないが，いずれにせよこの詩は，若き日の詩人の古きものへの愛着の深さを端的に示しているわけで，『ケルトの薄明』をはじめとする一連の folklore の収集と同じ制作態度の産物と考えられよう。

ディアドリの場合

ケルト伝説の中の数あるヒーローやヒロインの中に Deirdre という名の女性がいる。研究社の英米文学辞典の Deirdre の項では次のように説明されている。

> Ireland 伝説に出る女性。Ulster の王 Conchubar の楽人 Fedlimid（または Felim）の娘で，その美貌は多くの英雄を悲運に導くべし，と予言される。王の妃と定められるが，Usnach〔usn ə〕の子 Naoise と恋に落ちて Scotland に逃亡。やがて Naoise 兄弟は王に殺され，彼女は自殺する。Yeats，Synge，'AE' ら，Ireland の詩人・劇作家は好んで題材とした。[7]

たしかに1906年に上演され，翌年出版された詩劇 *Deirdre* は劇作家としてのイェーツの代表作の1つである。ところで，この悲運の女性ディアトリ（あるいはディアドラ）は，何ゆえにこれほどまでにアイルランドの詩人たちの創作意欲をかきたてるのか。この点については野中涼氏の言葉を引用する。

> ……ディアドラの話はおそらくコノール王の卑劣を憎むとともに，それ以上に彼女が権威を無視してほんとうに自分の愛するものをえらび，迫害に耐えてあくまで自分の選択を生きたというけなげな誠実さが，ケルト人の心を打ったのであろう。現代の初期にはこの説話は A. E. の詩劇 *Deirdre*

(1902)や Yeats の詩劇(1906), J. M. Synge の劇 *Deirdre of the Sorrows* (1910), James Stephens のロマンス Deirdre (1923)など，じつに多くのアイルランド文学者たちに扱われたからである。それはすべて自分の真の感情をごまかさない生き方にたいする賛美と尊敬が，祖国独立の運動を支持していた彼らの創作衝動を強くかき立てたからにちがいない。[8]

まさに至言であると思う。さらに，ディアドリの最期の詳細を知れば，野中氏の言葉がいっそうよく納得できよう。

コノア王は，そこで無理強いにデーズレを自分のものにしてしまった。そしてそれから一年間の間，デーズレはエメン・マーハの宮殿の中にコノア王と一緒に暮した。が，その間，一度も彼女は笑い顔を見せたことがなかったのである。

ある時，コノア王はデーズレに向かって聞いた。

「デーズレ，この世でおまえがいちばん嫌いなものはなんだね？」

たずねるとデーズレは，言下に答えた。

「あなたです。それからダラフトのオウエンです」

その時，オウエンはコノア王とデーズレの側に立っていたのである。オウエンの顔をしばらく見ていた後，コノア王は言った。

「そうか。それではこれから一年の間，おまえはオウエンと同棲しなければならない」

なんという残虐なことであろう。かくしてデーズレは馬車に乗せられた。彼女は，じっと地面を見つめたきりで，一度も顔を上げなかった。こんなにもひどい苦しみを与える人々の顔を，どんなことがあっても二度と見まいと彼女は固く決心していたのである。

コノア王は彼女の様子を見ながら，嘲笑するように言った。

「私とオウエンとに挟(はさ)まれたおまえの眼付(めつ)きは，二匹の牡羊(おひつじ)に挟まれた牝羊の眼付きとそっくりだね」

この言葉を聞くと同時に，デーズレは何を思ったか，急にすっくと立上がった。これ以上の屈辱には耐えられないと思ったのであろう，デーズレは身を躍らせて馬車からとび下りた。そして頭を岩にぶっつけて死んでしまった。[9]

以上のように，ディアドリの場合は，アイルランド人がケルト伝説に寄せる

思い入れの深さをうかがい知るには格好の例といえよう。

『葦間の風』というタイトルの意味するもの

The Wind among the Reeds は，そこに収められた諸篇が，それより約10年前に出した *The Wandering of Oisin*『オシーンの放浪』(1889)の頃の，いわばアイルランド神話の再話であった習作の域から脱却して，同様な素材を扱いながらも，そこにいっそうの象徴性と神秘性が加わって，芸術性豊かな作品にまで高められているという意味で，画期的な詩集といえるであろう。そのタイトル自体象徴性豊かなものであり，そのまま日本語に直訳しても原語のもつイメージが崩れないところが妙である。ところでイェーツはどこからこのタイトルを思いついたのであろうか。*The Celtic Twilght* の中の1篇 "The Golden Age" の中に次のような一節がある。

> ・・・I seemed to hear a voice of lamentation out of the Golden Age. It told me that we are imperfect, incomplete, and no more like a beautiful woven web, but like a bundle of cords knotted together and flung into a corner. It said that the world was once all perfect and kindly, and that still the kindly and perfect world existed, but buried like a mass of roses under many spadefuls of earth. The faeries and the more innocent of the spirits dwelt within it, and lamented over our fallen world in the lamentation of the *wind-tossed reeds*, in the song of the birds, in the moan of the waves, and in the sweet cry of the fiddle. ・・・[10]（斜体字筆者）

つまり若き日のイェーツは，葦間をわたる風のそよぎの中にも，失われた黄金時代を嘆き悲しむ妖精たちの声を聞いたのである。要するに『葦間の風』は，はるかなるドリームランド追慕の哀歌であると同時に，ドリームランドへの回帰の呼びかけなのである。

詩集『葦間の風』中の 'twilight' poetry

既述の『新選イェーツ詩集』の選者ノーマン・ジェフェアーズは同書の Introduction の中で初期のイェーツの詩風を代表する一連の詩の総称として

‘twilight’ poetry という極めて的確な表現を用いている。

> ・・・Yeats wrote poetry from his teens — probably as early as 1883 — until his death in 1939 : he developed and changed his style, and startling it seemed to many of those who had admired his early wistful ‘*twilight*’ *poetry* ; ・・・[11] (斜体字筆者)

そして筆者が本稿において論述しようとしているのは，まさしくその‘twilight’ poetryの代表作を収めたと見なされる詩集『葦間の風』中の幾つかの詩篇なのである。

The Hosting of Sidhe

The Host is riding from Knocknarea
And over the grave of Clooth-na-Bare ;
Caoilte tossing his burning hair,
And Niamh calling *Away, come away :*
Empty your heart of its mortal dream.
The winds awaken, the leaves whirl round,
Our cheeks are pale, our hair is unbound,
Our breasts are heaving, our eyes are agleam,
Our arms are waving, our lips are apart ;
And if any gaze on our rushing band,
We come between him and the hope of his heart.
The host is rushing ‘twixt night and day,
And where is there hope or deed as fair ?
Caoilte tossing his burning hair,
And Niamh calling *Away, come away :*

妖精(シイ)の群

妖精の群は風に乗り　ノックナリから
クルーホ・ナ・バールの墓を越えて行く
クィールシャは焔のような髪を打ちなびかせ

ニーアブは叫ぶ　「こっちへこーい　逃げてこーい
はかない夢は心から追払え
風は目覚め　木の葉は旋回する
あたし達の頬は色を失い　髪は乱れる
あたし達の胸は波打ち　眼は輝く
あたし達の腕は振られ　唇は開かれる
あたし達の飛んで行く群に目を見張る者がいたら
仕事が手に付かないようにしてやる
希望を胸に抱けないようにしてやる」
妖精の群は昼と夜とのはざまを飛んで行く
こんなに正面(まとも)な仕事や希望がどこにあるだろうか
クィールシャは焔のような髪を打ちなびかせ
ニーアブは叫ぶ　「こっちへこーい　逃げてこーい」[12]

詩集『葦間の風』の巻頭を飾るのがこの詩である。邦訳の方は新しい口語訳を借用したが，ちなみに尾島庄太郎訳ではタイトルは「妖精合衆」であり，冒頭は「群がれる妖精はクルウスナベアの墓地をこえて。／リーアの丘から駒駆ける。／キールタは焔なす髪をふりみだし，ニーアヴは叫ぶ……」となる。Host でなく Hosting であるところを「合衆」と訳したのは尾島訳の1つの工夫であろうが，2種類の訳を比較して感じられるのは，何よりもまず，固有名詞の発音と邦訳におけるその表記のむずかしさであろう。この詩の解釈に当たっては，まず sidhe「シイ」が元来ゲール語で，＜風＞を意味することを知っておれば参考になろうが，読者はさらに，それぞれの地名の背後にある伝説と登場する人物についての知識をもたなくてはならない。要するに地名はいずれも妖精族にゆかりのものであり，Caoilte は神話に出てくるフィアンナ族の仲間で最も足が速いとされる人物であり，Niamh はかの英雄 Oisin（オシーンすなわちオシアン）を Tir Na n'Og（常若の国）に誘惑した美女である。したがって，ニーアヴはこの詩においてもいわば「かどわかし」を役職とする妖精として描かれているのである。結局この詩は，わずらわしい世俗を逃れて神仙の世界へ来れという誘いの詩であろう。したがって，まさしくこの詩集のライトモティーフを高らかに歌い上げたものであるといえないだろうか。なお，同詩集には同巧の詩として "The Unappeasable Host"「鎮め難いい妖精群」が挙げられると思うが，同巧異曲とはいえ，こちらも出来栄えは決して二番煎じ的なものではない。

"The Host of the Air" は典型的な妖精詩である。田部隆次はタイトルを「空の人」と訳したことがあるが，要するに（風に乗って旅する）「妖精たち」の意味である。

O'Driscoll drove with a song
The wild duck and the drake
From the tall and the tufted reeds
Of the drear Hart Lake.

という第1連ではじまるこのバラッドの成立事情は既述の "Down by the Salley Gardens" の場合といささか似ている。つまり，この詩の場合も失われかけた古い歌の復元の試みなのである。*The Celtic Twilight* 中の1篇 "Kidnappers" の中に，ある老女がゲール語で歌うのを聞いたといういきさつと，新妻が妖精の群に連れ去られるというその話が収録されている。きわめて平易なこの物語詩は，今日ではめったに取り上げて論じられることはないのであるが，かの Lafcadio Hearn (1850-1904) はその講義録 "Some Fairy Literature" の中で "the best modern fairy poem by far which I know of" とまで絶賛し，詳細にわたる，ゆきとどいた鑑賞を行なっているが，その前置きの中でイェーツに言及して次のように述べている。

> ・・・In the latter part of the century there was for a time something of a popular reaction against the romantic and supernatural element either in prose or in poetry. But now another reaction has set in, and fairy literature has again become popular. *It has one representative poet, William Buttler Yeats, who himself collected a great number of stories and legends about fairies from the peasantry of Southern Ireland*・・・[13]（斜体字筆者）

ハーンの生きた時代を考えれば，その後のイェーツを知らない彼が，イェーツを妖精詩の書き手と見なしていたのは無理のないことであるが，『ケルトの薄明』その他の著作の存在をすでに知っていたことは，『怪談』・『奇談』の作者としてのハーンが思い合わされるだけに，はなはだ興味深い。

Into the Twilight

Out-worn heart, in a time out-worn,
Come clear of the nets of wrong and right ;
Laugh, heart, again in the grey twilight,
Sigh, heart, again in the dew of the morn.

Your mother Eire is always young,
Dew ever shining and twilight grey ;
Though hope fall from you and love decay.
Burning in fires of a slanderous tongue.

Come, heart, where hill is heaped upon hill :
For there the mystical brotherhood
Of sun and moon and hollow and wood
And river and stream work out their will ;

And God stands winding His lonely horn,
And time and the world are ever in flight ;
And love is less kind than the grey twilight,
And hope is less dear than the dew of the morn.

薄　明　境

疲憊(ひはい)の時の疲憊せるこころよきたれ
善悪のきづなを断ちて。
笑へ，こころよ，灰色のたそがれに復(ま)た，
なげけ，こころよ，また朝のしたたる露(つゆ)に

たらちねの母のEire(エイレ)は常若(とこわか)に，
また露はつねに輝き薄明(たそがれ)は灰いろなせり。
讒謗(ざんぼう)の舌の炎に燃えゆきて
よしや爾(な)が希望(のぞみ)はやぶれまた愛はおとろへんとも。

こころよ，来れ，丘，丘にかさなるかたに。
そこにありては，日と月と，窪地と森と
川と流は，玄妙のえにしをむすび，
意のままの生をいとなみ，

また神は音いろさびしき角笛を吹きて佇み，
「時」と「世」は，をやみなくうつろひゆきて，
愛は，また，灰いろの黄昏よりも情なく，
希望は朝の露よりもしたしみうすきものなれば。[14]

この詩は最初“The Celtic Twilight”と題されており，のちに同じタイトルの散文集『ケルトの薄明』のエピローグとして用いられる際に現在のように改題された。邦訳のタイトルは直訳の「薄明の中へ」が最も自然であろうが，「薄明境」とあるのは文語訳のせいであろう。この詩は格調の高さの点でも文字どおりイェーツの‘twilight’poetry の頂点に達した1篇といえよう。原作の格調の高さをよく伝えていると思われるので，訳詩の方はあえて矢野峰人による文語訳を借用した。けだし，『ケルトの薄明』の巻末を飾るにはふさわしい1篇であろう。同じく，詩集『葦間の風』の中の同巧異曲の詩篇としては“The Secret Rose”が上げられる。そしてこの方は逆に題名を“To the Secret Rose”と改めて散文集 *The Secret Rose* のプロローグとして用いられたのである。筆者はこれら両詩篇を本質的にはドリームランドの賛歌であると考えている。

“The Song of Wandering Aengus”は最初“A Mad Song”と題されていた。それが“The Song of Wandering Aengus”とタイトルを変えただけで，神韻縹緲とした趣きのある，格調の高い詩篇に生まれ変わったといえる。なお，この詩については，1989年に発表した小論『初期のイェーツとその影響――“The Song of Wandering Aengus”を中心に』（山口大学英語と英米文学，第24号）の中で記述したので，ここではなるべく重複を避けて，略説を載せることにする。

この詩に付した notes の中で作者は例によってその成立事情を述べている。

The poem was suggested to me by a Greek folk song; but the folk

belief of Greece is very like that of Ireland, and I certainly thought, when I wrote it, of Ireland, and of the spirits that are in Ireland, [15]

イェーツの言葉をそのまま素直にとれば，この詩にはすでにギリシャ的要素とケルト的要素の混在が認められねばならない。ところが，作者はさらに語を継いで，Galway 地方のある老人から聞いたという話を付記しているが，それは，やはり『ケルトの薄明』の中の1篇に収録されている話に他ならないのである。「ある朝その老人が木を切っていると，そこに若い女が堅果を拾っているのを見た。ゆたかな髪を肩に垂らした背丈の高い美女で，きわめて素朴な身なりをしていた。老人の姿に気付くや否や，かき消すように女は見えなくなった。そして，あとをいくら尋ねてもついに再び見ることが出来なかった。」というのである。そうだとすれば，この詩にはアイルランドの民話的要素も盛り込まれているわけである。

愛の神アンガス（Aengus エンガスはイェーツの表記である。）については，1988年刊行の *The Aquarian Guide to the British and Iritish Mythology* の Angus mac Og / Aengus / Oengus の項にイェーツの付した notes の補注にすべき格好の記述がある。すなわち，8世紀のテキスト‘Aislinge Oenguso’（アンガスの夢）に次のような話が出ているという。「アンガスは夢の中で妖精界の乙女 *Caer Ibormeth* の訪れを受け，いとしさの余り恋患いにかかり，Bodb の助けを借りてようやく彼女を見つけ出す。彼女は1年ごとに白鳥と人間の姿に交互に変身するのだった。アンガスは Samhain のロッホ・ベル・ドラゴンで彼女を見つけた。彼女は，互いに銀の鎖で繋がれて，149羽の白鳥に変身した乙女たちと一緒にいた。アンガスもまた白鳥の姿になり，一緒になって湖を三たび巡りながら，極めて美しい眠りの曲を歌ったので，近くにいたものは皆三日三晩眠りに陥った。アンガスは晴れて彼女を伴ってその宮殿であるブリグ・ナ・ボインに戻った。」というのである。さらに同書は付記していう。

W. B. Yeats' poem ‘The Song of Wandering Aengus’ is a retelling of this event. [16]

したがってこの詩篇は，少なくともギリシャ的要素，アイルランド民話的要素，ケルト神話的要素の3者を重層的に重ね合わせて渾然一体化し，しかもなおかつよく simplicity を保ち得ているという点で，類い稀なる作品とい

える。また,「背丈の高い美女」といえば,イェーツにとって永遠の女性であった Maud Gonne のイメージと重ね合わせずにはいられない。この詩は,愛の神エンガスが永遠の愛を求めて彷徨する姿を歌いながら,憂国の美女モード・ゴンへのかなえられぬ愛の懊悩をダブらせているというのが一般的な解釈であろう。

・・・・・・

And when white moths were on the wing,
And moth-like stars were flickering out,

・・・・・・

これは同詩の一節であるが,かの厨川白村(1880-1923)はその著書である英詩の注釈書『現代抒情詩選』の中でこの詩に注していみじくも次のように言っている。

> ・・・此 twilight こそは神秘詩人 Yeats に取って,いつも一番なつかしい夢まぼろしの時刻である。[17]

そして白村もまた,イェーツの‘twilight ’ poetry を愛するがゆえに,その後の彼の変貌ぶりを慨嘆した一人であった。

さらに,この詩とは趣は異なるが,“The Valley of the Black Pig”「黒豚峡谷」(1896)も,古い言い伝えを踏まえた格調高い作品として,注目される。

結　　語

最後にイェーツ詩の評価について言えば,イェーツ自身がその後の詩的発展の中で,自己の初期の詩への訣別を告げてきたのである。いわば,それは青春時代のあくがれの地であるドリームランドへの訣別であった。また,イェーツの中期以降の詩を高く評価する世間一般の傾向は今後も続くであろう。しかし,初期の詩風を代表する,神韻縹緲とした雰囲気を持つ詩篇の数々も,一条の光芒として,独自の輝きを放ちつづけるのではあるまいか。

注

1, 2, 3, 5, 10 *Mythologies*, W. B. Yeats, Macmillan, 1962

4 『遠野物語』, 柳田国男, 角川書店, 昭和57年

6, 11, *Poems of W. B. Yeats, A New Selection*, Macmillan, 1988

7 『英米文学辞典』, 研究社, 昭和60年

8 *Old Celtic Romances, Translated from the Gaelic by P. W. Joyce*, 野中涼編註, 松柏社, 平成元年

9 『イギリスの神話伝説ーアイルランドの神話伝説［Ⅰ］ー』, 八住利雄, 昭和62年

12 『イェーツ詩集』, 中林孝雄・中林良雄訳, 松柏社, 平成2年

13 *Poets and Poems, Lafcadio Hearn*, 田部隆次編, 北星堂, 昭和3年

14 『世界文学全集48 世界近代詩人十人集』のうち「イエーツ編」, 河出書房, 昭和38年

15 *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*, Edited by Peter Allt and Russel K. Alspach, Macmillan, 1973

16 *The Aquarian Guide to the British and Irish Mythology*, John and Caitlin Mathews, The Aquarian Press, 1988

17 『現代抒情詩選』, 厨川白村, アルス, 昭和3年

Yeats in the Dreamland—Chiefly on *The Celtic Twilight* and *The Wind among the Reeds*

Yoji Kawano

It is a generally accepted opinion that Yeats, unlike most poets, developed and changed the style of poetry as he grew older, and that he wrote much of his best poems in the later years of his life. But his improvements were, so to speak, a sharp departure from the dreamland. In his early days he devoted his young passion to the study of Irish folklore, the fruit of which might be seen most clearly in *The Celtic Twilight*. Incidentally, this collection of Irish folk tales bears a close resemblance to Kunio Yanagida's *Tōno Monogatari (The Folk Tales of Tōno County)* by a casual coincidence. Early Yeats showed a deep attachment to things lost and forgotten. That is why he revived gods and heroes of Irish mythology in his early lyrics. We can find typical examples of his 'twilight' poetry in *The Wind among the Reeds*. Although his later poems are much more highly evaluated today, it is those works in this collection of early poems that have, in a sense, attained a rare beauty and reached the stage of perfection.